

コラム55:ひな人形の世界 (2017年2月)

250年前の旧家「太田家住宅」に雛(ひな)人形を飾って、今年で15年。江戸時代の古今雛や紙雛から、現代の組木雛や創作人形まで、あらゆる種類の雛人形を、古い屋敷のいたる所に飾ってみました。質も量も、今までで一番充実した内容になったと思います。



ひな御殿 匠の技に 出会う春

今回の見どころは、「極小雛御殿」。90cm四方の中に創られた御殿と庭園、明治の名工の残した驚異の「雛ワールド」を、覗いてみてください。

太田家住宅の雛祭りは2月1日～3月31日
(10:00~17:00)

3月22・29以外期間中無休

(鞆町並み雛祭りは2月20日～3月21日)

毎年この季節になると、親しい人に向けて こんなハガキを毎年出しています。もちろん広島市近郊に住んでいる人にとって、福山の鞆の浦までは少し遠いですから、雛人形を見に行ってくれそうな一部の人に限ります。早いもので鞆の浦詣でも、15年目。妻の勤める会社の同僚に鞆の出身の人がいて頼まれて、という縁があって始めたことです。良く続いたものだと思います。儲けになるわけではなく、「文化的なボランティア活動」ですからね。自動車道を使って福山まで1時間、そこから海側へ30分余りの距離です。雛飾りの作りと片付けのために、私は1月と4月に2回、妻の方は倍くらい行っていると思います。以前に書いた「コラム39:東京そして鞆の浦」に書いたように、私は妻の「行き過ぎた雛人形道楽」に付き合う「飾り付け助手」にすぎないのですがね。それでも渋々付き合っているうちに、人形の良さとか価値が、何となくわかってくるから不思議です。今では蔵の中の一つのコーナーを任されるまでになりましたね。

今回は、太田家住宅の雛祭りを一部の「さわりの部分」だけでも紹介してみたいと思います。今回は「ひな人形研究家」の我が愚妻、カミサンのことですが、彼女のコメントを挿みながらやってみようと思います。ウチのカミサンの場合は骨董的な価値の物を集めるというより、新しい創作人形を含めた、いろんなジャンルの雛の世界を、「きれい!」「おもしろい!」「かわいい!」という感覚で求めてきたという感じですから、本人に聞かんと、よくわからんことも多いのです。

古い木戸の敷居を跨いで入ると、左手に番台のような受付がありますので、そこで入館料400円をお支払いください。右手は「店の間」と呼ばれる畳敷きの部屋になっており、格式の高い古い雛人形が出迎えてくれます。以下はカミサンのコメントです。



「これは江戸時代の古今雛(こきんびな)になるのね。これは大人の「五人囃子」(ごにんばやし)だけど、左から右に、音の大きい順番に並んでいて、太鼓(たいこ)から大鼓(おおつづみ)、小鼓(こつづみ)、笛、謡(うたい)の順になっとるんよ。顔の表情がとっても豊かで、オモシロイよね!」

有職雛(ゆうそくびな)とか古今雛(こきんびな)とか言われても、いまだに私にも良くわからないのですが、顔の形と着ている衣装で判別するようすな。目を隣の部屋に移すと、「玄関の間」といわれる座敷に、大きな雛段が組まれています。沢山の人形が飾られています、これは「七段飾り」(ななだんかざり)と呼ばれる形式ですね。



「これは明治末期のもので、京都の有名な雛人形師の「大木平蔵」のつくったものね。関西では彼の造った人形を飾ることが、家のステイタス(身分・地位)になっていたみたいね。下段の方に沢山に並べられているのは道具(どうぐ)と呼ばれている家具調度品のミニチュアだけど、本物の道具と同じように作られているというのがスゴイよね。長持の中には、ちゃんと布団も入ってるのよ。日本の職人技はすばらしいでしょう！」

このような飾りは最初からあったものではなく、江戸の中期から後期にかけてのことだといわれていますね。一番上の御殿の中で、向かって右に居るのが男雛(おびな)、向かって左が女雛(めびな)ですね。二段目に飾られるのが三人官女(さんにんかんじょ)で、上の段の貴族夫婦の世話をする宮仕えの侍女(じじょ)ですね。3段目に居るのが五人囃子(ごにんばやし)といって、太鼓や笛で宴を盛り上げる演奏グループというわけです。このような段飾りをしたのは一般庶民ではなく、裕福な商家や位の高い武家の屋敷のみですね。彼らにとって皇族とか公家の生活は、「高嶺の花」であり、上流階級の象徴であったようで、それが雛人形が「宮廷の世界」になった理由のようですよ。

隣に移動すると広い土間になっています。ここは「奥土間」と言われる場所ですが、江戸時代は炊事場として使われていたようです。炊き出しが出来そうな大きな窯が四つ並び、ずいぶん多くの男たちがこの造り酒屋で働いていたことが想像されます。今はその後ろに緋毛氈がかけられて、一面が雛人形コーナーとなっています。華やかな「大木平蔵」作品がズラリと並んでいます、その中でとりわけ可憐な人形が目にとまります。

「これは明治の頃の彼の作品で、＜胡蝶の舞＞と名づけられているの。雅楽に合わせて踊っている稚児たちの姿なんだけど、カワイイでしょう！何年もかけて少しずつ集めたのよ」



土間から、格子戸越しに座敷を覗くと、手前には変わった雰囲気の小さな人形が見え、その向こうの主家の座敷には、大きな五人の子供の人形たちが座って食事をしています。



「格子戸の側にあるのは、美吟庵(びぎあん)さんという四国の陶芸作家の人形ね。現代の創作人形で、小さいけど妙に色っぽくてオモシロイでしょう！大きいのは市松(いちまつ)人形といって、女の子が抱きかかえたり、着せ替えをして遊ぶためのものね。この人形の着物は、私が小さい時に着ていたものを作りなおして着せとるんよ」

市松人形は、大正から昭和初期にかけて、もてはやされた人形ですが、後には嫁入り道具として考えられたようです。「つらいことや悲しいことが合ったら、お人形さんに愚痴聞いてもろて頑張りや」という親の気持ちが込められていたというわけです。振袖姿の女の子に見えますが、実は男の子なのです。江戸時代の歌舞伎の女形役者「市松」に似せたところから生まれたらしいのですね。

奥土間から座敷に上がり、次の間に進むと全く異なった雰囲気の人形たちがいる部屋に入ります。「十二支のひなまつり」とか「キツネの嫁入り」「一寸法師」といったタイトルが付けられて、小さな人形たちが部屋一杯に飾ってあり、不思議な「癒しの空間」になっています。題して「日本昔話のはじまり！はじまり！」というわけです。



「これは広島市内に住む、實田(じつだ)さんという普通の主婦の人の作品なのよ。樹脂粘土で作って、自分で着物を縫って着せているんだけど、ホントにホノボノとしてカワイイよね。そういえば、この人形たちの顔って、どこか作者に似てるのよ。作っているうちに似てくるのかねえ」

江戸の匂いのする広々とした主屋の座敷のそれぞれの部屋には、その時代にふさわしい雛人形が部屋の一角に佇んでいます。まるで自分の本来の居場所を見つけたように、微笑んでいるようですね。その中で大広間の上座に鎮座して、ひときわ存在感をみせている雛人形がいます。



「これは江戸時代の古今雛(こきんびな)になるのね。入り口の玄関の間にあつたと同じく、顔は木彫りで作っているのよ。古いものなので、男雛(おびな)の衣装はボロボロに剥げてしまっているけど、黒い色は剥げやすいのよ。このままで、下手に直さないほうがいいのかもしいね。ここに飾ると、人形たちがみんな優しい顔になるのよね」

これは妻が持っている人形の中で、私が一番気に入っているものですね。特に五人囃子の子供の顔が好きですね。何とも愛らしい表情をしているではないですか。一体どんな男がこれをつくったんでしょうかねえ。これだけの作品になると、雛人形師というより、「仏師屋」(ぶっしや)と呼ばれた、

仏像を彫る職人が作ったもののようです。この顔は彼の子供に似せたのでしょうか。彼の名前は残っていませんが、彼の作品はこうして生き続けているのです。人形が創られた頃と、同じ時代の屋敷の片隅に自分の居場所を見つけて……。「裏長屋」と呼ばれた6畳くらいの広さの畳と土間のある一間での作業。彼はどんな思いで、どれだけの時を費やしてこの雛人形をつくったのか？これを作って彼はどれだけの収入を得たのか？今ではそれを知ることは出来ませんが、当時は人形一体をつくることで一年間暮らすことができたと言われています。すばらしい人形を創る「匠の技」、それを評価してくれる裕福な階層、そういう時代が過去にあったということでしょうか。

おっと！同じ大広間の一角に巨大な雛人形が！「なんだこれは！」という感じではないですか。ほぼ普通の人間と同じくらいの大きさ、等身大の雛人形です。享保雛(きょうほびな)と仰々しい木札が付いています。



「これは顔と衣装は「享保雛」だけど、新しいものなのよ。岐阜の人形店が展示会用に作らせたものらしい。ここは太田家の雛人形展を見に来てくれた人の記念写真コーナー。男雛と女雛の冠も用意しているので、カップルで撮ってもらうといいんじゃないかな」

男の側から見ると、「雛祭りって何だろう？」と思うんですよ。どうして女の方はこんなものに夢中になるんだろう、と思うんですね。起源を辿ると、平安時代の公家社会の、「ひいな遊び」が「ひな祭り」になったといわれていますね。これは「ひな」とか「ひいな」と呼ばれる、紙で作られた小さな人形で遊ぶ少女たちの「ままごと遊び」であったようです。このことと、その当時からあった民間信仰が結びつき、発展してきたのが「雛祭り」というわけです。

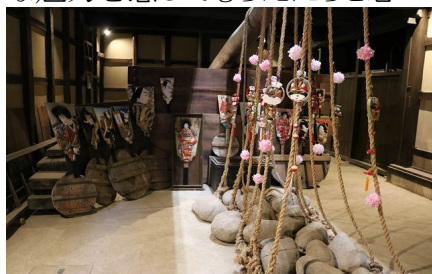
このような雛飾りの行事は、その時代の子供の死亡率が異常に高かったことが、おおいに起因しているようです。なにしろ江戸時代の平均寿命が30歳代という時代ですから、統計的な数字は不明ですが、あの頃は子供の時に死亡することが非常に多かったらしいのです。医療が発達していない当時においては、抗生物質などありませんから、結核や肺炎で子供が簡単になくなっていった時代だったのです。現代のように子供が無事に育つことが「当たり前」ではなく、「かろうじて」生きながらえるというような時代状況であったのです。女の子の素朴な「人形遊び」があり、生まれた子供が無事に育つための「祓い」(はらい)であった雛祭りが、時代とともに変化してゆくことで、「春の訪れを形で表す華やかな行事」となっていった、ということでしょうね。

座敷のそれぞれの部屋の雛人形の紹介は、ここでは省略させていただいて、土間から下りて右の木戸をくぐり、中庭にでもまいりましょう。中庭に出ると、「南蔵」という建物が見えます。ここは蔵というより、保命酒屋(ほうめいしゅや)であった太田家のメインの作業場であったようです。石段を昇って入ると、L字型の細長い土間の左には大きなカメがズラリと並び、その向かいには酒造りの道具が展示されています。今は少々肌寒く、薄暗い寂しい場所ですね。



ところが今は全く違った世界になっているのです！ここに足を踏み入ると、まず目に飛び込ん
でくるのが、ミッキーマウス！そして「ドラえもん」や「タレパンダ」「キティちゃん」といったアニメキ
ャクターの世界。ここは雛人形の「子供の国」！三年前から、私はカミサンの「助手」から昇格(?)
して、この蔵の中を一任され、ここを明るい「夢の空間」にすべく創意工夫をしてきたのですよ。今
年は二本の縄を交叉させて、ここに人形を吊るすことで、より立体感のある「アニメの雛世界」を創
れたかなと思っています。自己採点は80点というところですかね。雛祭りの季節には幼稚園の子
供たちの団体さんも入るようで、「太田家を守る会」の人から、「ここへ来たら歓声を上げて大喜び
するのよ」という話を聞くと、ウレシイですねえ。子供たちには「江戸の雛」よりも、ドラえもんやアン
パンマンの方がいいに決まっていますよ。

アニメの向いは、対照的に地味な「土人形」ですね。これは古代の土偶や埴輪をルーツとする素
焼きの人形です。江戸以前からあったようですが、全国各地の郷土玩具として、今日まで残ってい
ます。木彫りの雛人形など手に入れることが出来なかった人たちの、「庶民の雛人形」が土雛とい
うわけです。今回は、明治期の山形や秋田の土雛を中心に飾りましたが、土人形に彩色した素朴
な魅力を感じてもらえたらと思いますね。



南蔵の長い土間の突き当りには、何やら奇怪な巨大物体が
置いてあります。これは酒を造るための道具なんですね。石の
おもりと人の体重で、酒を搾る機械なのです。これについては、
4年前に書いた「コラム20:旧家の雛祭り」で、図面いりで詳しく
書きましたので、ここでは省略します。今回はこのコーナーに初
めて飾りをしました。使ったのは雛人形ではなく、なんと「羽子
板」(はごいた)ですよ。女の子が羽の付いた球を打ち合う「正
月遊び」ですが、今の若い人には理解不能かもしれません。しかしこのたび飾ったのはそんな遊
び道具ではなく、歌舞伎役者や美人画の顔の載った、飾るための「大きな羽子板」ですね。ウチ
のカミサンはこんなものまで持っていたのかと、感心するやらアキレルやら……

羽子板コーナーを右に折れると、なにやら小さな木の雛人形がそこら中に飾られていますね。こ
れも現代の創作人形の一つで「組木雛」(くみきびな)というらしいですね。こんなものにも愛好者
がいるらしく、昨年の来館者のリクエストで出したそうですよ。それにしても、古びた駕籠(かご)
の中には「オルゴール雛」、大きな木馬の背の上には「月見雛」が。ウチのカミサンのこだわりはスゴ
イですね。「屋敷中を人形で埋めたいよね。来年は庭に飾ってみたいなあ」とか言ってますよ。

羽子板コーナーを右に折れると、なにやら小さな木の雛人形がそこら中に飾られていますね。こ
れも現代の創作人形の一つで「組木雛」(くみきびな)というらしいですね。こんなものにも愛好者
がいるらしく、昨年の来館者のリクエストで出したそうですよ。それにしても、古びた駕籠(かご)
の中には「オルゴール雛」、大きな木馬の背の上には「月見雛」が。ウチのカミサンのこだわりはスゴ
イですね。「屋敷中を人形で埋めたいよね。来年は庭に飾ってみたいなあ」とか言ってますよ。

そしてこの突き当りの「新蔵」(しんくら)と呼ばれる場所、重く分厚い木戸を開けると、そこは華や
かな雛の世界が一杯に！そして今年の雛飾りのメイン作品、主役となるのが、蔵の中央に鎮座す
る「極小雛御殿」と名づけられたもの。雛人形の世界では「芥子雛」(けしびな)と呼ばれている、小
さな小さな雛たちの創るジオラマ(小型模型)「90cm四方の小世界」がここにあります。



<カミサンのコメント>

「これを初めて見た時には震えたよね。これは明治期のものだけど、こんなに精巧に創られた雛御殿は初めて見たの。御殿の中の小さな襖絵(ふすまえ)も手書きで、中国の偉人が書かれているのよ。御殿のまえの庭も、植木や池、そこにオシドリまで泳いでいるんだから、スゴイでしょう！」

広々とした新蔵の中、右手の「雛段」には「浮世人形」(うきよにんぎょう)がズバリ。これは日本昔話をモチーフにした人形ですが、子供が生まれた時のお祝いに使ったようですね。そして正面には江戸期の「百歳雛」(ひゃくさいびな)が威厳をもって鎮座しています。このコラムの冒頭でカミサンが飾っているのがそうですね。そして、蔵の左手には同じ衣装ながら、それぞれ違った顔をした「袴雛」(かみしもびな)がズバリと雛段に並んでいます。百歳雛については「コラム20:旧家の雛祭り」(’12・2)で、袴雛については「コラム8:町並み雛祭り」(’12・2)に詳述していますので、ここでは説明しないでおきましょう。

まずは、人間にとって「人形とはなんぞや」という視点から考えてみたいと思います。人形という字は「ひとがた」とも読めるのですが、そこに重大なヒントがあると思うのですよ。人間社会の多くの禍(わざわい)や穢れ(けがれ)を、我が身の代わりに「ひとがた」の人形に託して、水に流すという風習が雛祭りの原点であったようなのです。紙雛を川に流し、無病息災で一年間幸せに過ごせますようにと願う、「流しびな」という行事ですね。人形が川を下り、大海に消えてゆくことで、禍や穢れも消えていくというわけです。江戸時代から始まり、今でも鳥取あたりで行われているようですが、旧暦の3月3日(今年は3月30日)にやるようですね。

仏像や彫像や絵画といった人形(ひとがた)に祈るという行為をして、心の「安らぎ」や「救い」や「生きる力」を得てゆく……というのは人間だけに見られる姿であり、きわめて人間的で、人間らしい習性ということなのかもしれませんね。人間の子供程度の知能を有するチンパンジーであっても、人と一番身近に共存しているイヌであっても、決して「祈る」という行為をすることはなし、聞いたこともありませんよね。そのように考えると、人間と他の動物との距離は近いようで遠いという気がしますし、やはり人間というのは他の生物とは違う「不思議な動物」だと思います。

そして、どちらかと言えば、ヒトの中でも女性の方がこのような傾向が強いと思いますね。それは雛人形に対する女性の思い入れと通ずるものがありそうです。雛人形展は女の人にとっての「パワースポット」。元気をもらい、生きる力をもらっているのではないか、という気がするのですね。一昨年に、乳がん手術から無事に生還したカミサンが、「雛人形が私を守ってくれたんよね」と言いました。年をとるほど、男より女の方が、元気で長生きだと思っんですが、もしかしたらこの原因は雛人形じゃあないんですかね。

「カミサンに文句を言うても、こがいなコラムを書いとるようじゃあ、ワシも雛人形にとりつかれてしもうたんかのう」



<オマケです>

雛祭り 服着せるより オヤツくれ

一月の終わり、私たちが鞆の浦に雛飾りに行った時のこと。
ウチのベリーちゃんはペットホテルに預けいれ。
帰ってから迎えに行くと、こんな写真が付いてきました。
きっとイヤイヤながら無理に着物を着せられて撮られたのでしょう。
イヤだけど我慢しているという表情がモロに出ていますね。